アメリカにおける女子学生文化の歴史的展開

岩 田 弘 三*

1．はじめに

歴史的にみた場合、アメリカの大学では、どのような学生文化が発達してきたのだろうか。この点については，とくにアメリカのなかに専門教育と研究とを取り込んだ大学，つまりユニバーシティが出現する19世紀後半以前の時期，いわばアメリカの大学のすべてが，健全なキリスト教モラルを備えた紳士を作り出すという使命・目的を標榜し，カレッジと名乗っていた時代を中心として，潮木（1982，1986）やスミス（2001；第7章）などの手により，多くの紹介がなされている。たとえば，そこでは，全寮制教育を旨とする多くのカレッジのなかで，チューターと呼ばれる大学教師兼牧師たちが一日中，いかに教室のなかでの知的活動のみならず，日常生活の細部に到るまで，イン・ロコ・パレンティス（in loco parentis：親代わり）な態度で，抑圧的とも呼べるほどの保護・監督に努め，学生たちの道徳的・精神的指導に当たっていたか。そして，そのような息詰まる統制に対し，学生隆起を含めて，学生たちがいかに反抗し，それに対してまた教師がどのような規則をもって対処したのか。そのいたちごっこの様子が，活写されているのである。

しかし，そこで紹介されている学生文化は，あくまで男子学生を中心としたものであり，そこに女子学生が姿を現すことは皆無であったといってよい。たしかにアメリカでも，名門大学の多くは，女性の入学を拒んできた。たとえば，ハーバード大学が女性の入学を認め，共学化されたのは，1943年のことであった。また，1877年にコーネル大学を優秀な成績で卒業したケアリー・トーマス（Carey M. Thomas）という女子学生を，ジョンズ・ホプキンス大学の大学院は特別の計らいで受け入れた。しかし，彼女は，男子学生と一緒に席を並べて教室の授業に出ることは許されず，教室の後ろにカーテンを引き，その陰に座らされて講義を聞かなければならなかった，というエピソードも残されている（大庭，1993；193-4）。なお，ケアリー・トーマスは後に，ブリュン・モーア女子大学（Bryn Mawr College）の学長になる女性である。このような状況のなかで，女性の高等教育進学が可能となったのは，1636年に男子学生がハーバード大学の創設を嚆矢として高等教育の恩恵に預かれるようになった年から数えて，その2世紀後のことであった。つまり，1833年になってようやく，この国初の共学大学をうたい文句に，オバーリン大学（Oberlin College）が創設されることになった。さらに，1837年には，アメリカ初の女子高等教育機関となるマウント・ホリヨーク・女子セミナリー（Mount Holyoke Seminary：1893年からはカレッジ）が開校されている。そして，それを皮切りに，1863年にはバッサー女子大学（Vassar College）が，1875年にはウエルズリー女子大学（Wellesley College）と，スミス女子大学（Smith College）が，1879年にはラドクリフ女子

*広島大学高等教育研究開発センター学外研究員／武蔵野女子大学助教授

大学（Radcliffe College：ただし，正式にこの名称をもつ大学となったのは1893年）が，1885年にはブリュン・モーア女子大学が，1889年にはバーナード女子大学（Barnard College）といった具合に，後に「セブン・シスターズ」（Seven Sisters）と呼ばれることになる，アメリカ東部地区の7名門女子大学の開学があいつぐことになる。こういった高等教育機関のなかで，女子学生たちも学生文化を謳歌していたはずである。それは，男子学生たちが育んだ学生文化と，どの程度同じで，どこが異なったのであろうか。この点を，いくつかの文献をもとに，紹介・検討していくのが，本論の目的である。

2．女子の高等教育機関の特徴

冒頭で指摘したように，アメリカの大学がいまだカレッジと呼ばれていた時代に，男子大学では学生たちを紳士に育てるべく，両親から預かった大事な子弟が，わずかなりとも堕落の道に足を踏み外さないよう，生活指導面でも厳しい管理・監督を心がけた。しかし，当時の男性優位社会のなかで，女性には倫理的に男性をはるかに上回る品行方正さが求められた。それゆえ，女性だけを顧客とする女子教育機関は，悪しき風評が立つのを極力避け，両親が安心して娘を預けられるよう，男子大学以上に，生活指導面での管理・監督に注意を払わざるをえなかった。たとえば，教員養成を目的に掲げ，全寮制の女子高等教育機関として発足した，マウント・ホリヨーク・女子セミナリーについてみれば（Horowitz，1984；第1章），その校舎の2階部分に教室を集め，その上部の3～4階と2階の一部とを寄宿舎に充てるといった設計の建物を作り，教師も学生もともに1日の生活がこの校舎のなかだけで完結するように図ると同時に，教師集団が学生たちを，日がな厳しく監視できるよう配慮されていた。そして，この寄宿舎の部屋の配置に当たっては，教師が学生の管理をしやすいように，精神病院をモデルとして設計したとさえいう。さらに，この女子大学では日課の区切りをベルで知らせ，学生たちの生活時間を厳密に管理した。のみならず，学生たちは，自分がいかに学校の規則を守ろうと努力したか，毎日，自己報告（懺悔）させらえさえした。そこでの生活管理がいかに厳しいものであったかを，一人の学生は，つぎのようにぼやいている。「ああ，早く家に帰れたら，何とうれしいことでしょう。そこでは，ささやき声より大きな声をだしておしゃべりできるし，糸と重り（時計）にしたがって行動する必要もない」と。

3．女子学生文化の発生

このような息詰まる監理・統制のなかで，学生たちは従順に粛々と規則に従い，勉学だけに励んでいたわけではない。男子大学の場合と同様に，彼女たちは多くの悪ふざけ・悪戯に手を染めると同時に，様々な息抜きの場を創設していった。そのいくつかを，バッサー女子大学を例にとって紹介してみよう（Horowitz，1984；第4章）。この大学は，それまで男子の大学だけで教えられていた，リベラル・アーツ（伝統的教養）教育を，初めて女性に提供する高等教育機関として設立された。そして，マウント・ホリヨーク方式を受け継ぎ，教師は学生とともに寝起きし，学生たちの日常生

活を監視するという教育方針を採用した。

そういった管理体制のもとで，学生たちのあいだでは，とくに消灯時間後に教師の目を盗んで，壁を伝わって友達の部屋を訪問するという行為が横行した。たとえば，自習時間中に，病気で寝ている友達の部屋へ忍び込むことに成功したのはいいが，突然，教師が見舞いのために，その部屋を訪れてきた。そこで，この友達は，訪問してきた女子学生を隠すために，彼女を押入れに押し込んだ。教師の目は逃れられたが，教師が去るまで，彼女は30分間も押入れのなかに閉じ込められ，出てきた時は窒息しそうになっていた，というエピソードも残されている。また，食事の前に教師が説教を始めようとしたら，食堂に響きわたるほど大きな音がでるように，学生たちが湿ったコップの縁を擦り出した，という事例も報告されている。

一方，息抜きとしての女子学生の楽しみの一つは，食べることであった。多くの女子学生は，チーズトーストやキャンデー（fudge）作り，ティ・パーティーに熱中した（Solomon，1985；97）。さらに大がかりなものになると，ランチ・ボックスを持ち寄ったり，出前を取ったりして，数人の友人と自室で開催する，「ごちそう会」（spreads）と呼ばれる宴会も流行した。それらが，いかに日常的な行事になっていたかは，つぎのような報告記録を読めば，明らかである。たとえば，アイスクリームとフルーツケーキなどをメインデッシュとする，ある「ごちそう会」は，「教会での説教はあまりにも厳粛すぎたので，私たちはその効力を消すために速やかに何かしなければならない」，といった理由で始まっているからである。なお，この「ごちそう会」には，同じ階の住人である2人の教師も招待にあずかったという。もちろん，これらの会合が，友人との交友を深める儀式としても機能したことはいうまでもない。

さらに，ここで特筆しておかなければならないのは，女性同士の疑似恋愛ごっこの流行である。たとえば，イギリスでは1870年代以降，上中流階級向けの中等教育機関が登場するが，これら全寮制女学校では1870～90年代にかけて，女性教師や年上の女学生への「のぼせ上がり」（Raves）が横行したという（Vicinus，1985；第5章）。時期を同じくしてアメリカでも，「スマッシュ」（Smash）とか「クラッシュ」（Crush）と呼ばれる，女性同士の疑似恋愛ごっこが流行った。それは具体的にいえば，髪形を変えたり，花や詩などの贈り物をしたり，恋文をつけ届けたりして，お目当ての女子学生や女性教師の気を引くなどして，親密になる行為を指していた。ニューイングランド地方では，この種の恋愛ゲームはきわめて一般化しており，めでたくカップル成就となったあかつきには，「ボストン式結婚」（Boston marriage）と呼ばれていたという（Solomon，1985；100）。また，なかには，この恋愛ゲームで陥落させることに成功した女子学生の名前のリストを，誇らしげに壁に貼りだしていた強者女子学生も存在したという。さらに，女子学生同窓会協会（Association of Collegiate Alumnae）によって1882年に行われた，女子学生の健康調査では，これら恋愛ゲームによる失恋や嫉妬が，女子学生たちの健康に深刻な影響を与えていると報告されている。以上の事実は，この時期，これら恋愛ゲームがいかに，女子学生のあいだに蔓延していたかを，如実に示唆しているものと思われる。

4．組織的な課外活動（extra-curriculum）の展開

ここまで紹介してきたのは，学生文化のなかでも，あくまで私的行動に近い形態をとる活動に関してであった。それでは，より組織的に編成された課外活動については，どのような状況にあったのだろうか。男子大学では，18世紀半ば以前の時期に，討論クラブ（debating club）・文芸クラブ（literary society）が登場したのをかわきりに，1830～40年代にはフラターニティ（fraternity）と呼ばれる学生秘密結社（女子の場合はソロリティ：sorority）の創設を経て，19世紀中葉からは，スポーツ活動が全盛を迎える，というのが主要な流れとなる。とくに，大学スポーツは，大学対抗戦の開始・発展とともに，20世紀には学生文化の花形の地位をしめるようになっていく。そして，その間には，学生雑誌・学生新聞の編集，音楽関係のクラブ，宗教関係のクラブなどの活動も，順次花開いていったという（スミス，2001；第7章）。

女子大学においては，これら組織化された課外活動は，1870年代に一挙に開花することになる。まず，この時期から女子学生たちは，討論クラブに参加したり，学生雑誌・学生新聞の編集に携わり始めた。ただし，これら活動は，男性的な活動と考えられており，参加者はそれほど多くなかったとされる（Solomon，1985；第7章）。また，学生自治会が結成されだすのも，この頃である。共学大学でも，それまで男子学生に独占されてきた学生自治会に対抗し，女子学生だけの学生自治会が創設されていった。同様に，宗教活動は当初，大学のなかで，慈善協会（missionary society）活動，祈祷会，聖書研究会などの形で始まったが，YWCA に代表される組織への参加をつうじて，社会活動へと比重を移し，飛躍を遂げるのも，この時期あたりからとなる。加えて，男子学生のフラターニティ（fraternity）をまねて，1870～1880年代には，各大学にあいついで，ソロリティが結成されていくことになる。これらフラターニティ組織は，通学生を排除した。しかし，彼女らは彼女らなりに，通学途上で知り合いになった女子学生仲間集団を「汽車通学者フラターニティ」（railroad riding fraternity）と呼んで，交友・交遊を深めていったとされる（Solomon，1985；98-9）。

つぎにスポーツについてみれば，たとえばバッサー女子大学では創設5年後の1866年にすでに，「ローレル野球クラブ」の結成をみている。同様に，スミス女子大学，ウエルズリー女子大学でも大学創設とほぼ時を同じくして，野球部が結成されている（佐山，1997；25）。野球のみならず，この頃から女子学生たちは，多くのスポーツ活動を行うようになった。たとえば1896年には，スミス女子大学のマーガレット・ウエルズ（Marguerite Wells）が，バークシャー・ヒルへの5日がかりのピクニックを企画している。近隣の住民たちは，このショート・スカート姿の奇妙な女子学生の一団を「寛大にも」，ただもの珍しげに眺めているだけだった，という記事も残されている（Solomon，1985；99）。ただし，女子学生たちが，テニス，ホッケー，水泳，バスケットボールなどの競技を中心にして，男子大学と同様に大学対抗戦を開始し，それが盛んになるのは，もう少し後の時期まで待たねばならない。そして，多くの大衆が娯楽や賭の対象として，男子学生スポーツに熱狂したのに対し，女子学生スポーツは，それほど観客を集めなかったとされる（Solomon，1985；164）。

ところで，男子大学では，ハーバード大学の「血の月曜日」(Bloody Monday) に代表されるように，どの大学でも20世紀に入るまでには，新入生歓迎スポーツ対抗戦と称して，多くは新入生対2年生とのクラス（学年）対決の形をとる，新入生いじめを兼ねた儀式が慣行として定着していった（スミス，2001；第2章・第7章)。それと同様に，男子大学ほど手荒いものではなかったにしろ，いくつかの女子大学では，新入生を歓迎する行事の一つとして，学年対抗の形式をとる儀式が，観察されている（Horowitz，1984；172)。

たとえば，ブリュン・モーア女子大学では，「ランタンの夕べ」祭り（Lantern Night）と呼ばれる新入生歓迎会を催すのを常としていた。そこでは，ガウンと帽子で正装した新入生がみな，それぞれ2年生からランタンを受け継ぎ，それをもって学内を行進し，最後には元の場所で待っていた2年生と合流し，全員で一緒に喝采をあげ，校歌を歌うという儀式が厳かにとり行われている。問題は，その後である。つまり，それが終了した後から夜通しの半日をかけて，2年生は，1年生がまとっているガウンと帽子を強奪しようとし，1年生は必死にそれを阻止しようとする争奪戦が繰り広げられた。そして，自分のガウンと帽子を死守できなかった1年生は，翌朝に行われる礼拝のときに正装姿で参列できなく，大恥をかくことになったのである。同様に，ウエルズリー女子大学では，「植樹祭」(Tree Day) の日に，新入生が，「〇〇年入学組のクラス（学級）の木」(Class tree) を植樹するとともに，学級歌，学級の座右名，学級花などを披露することになっていた。そして，この儀式を経て初めて，新入生クラスは大学内で正式に，クラスとしての認知を受けることになっていた。これら学級歌，学級の座右名，学級花などは，「植樹祭」の日に初披露されるまでは，新入生クラス内の最高機密とされていた。その最高機密事項の内容を，事前に入手できれば，2年生クラスの勝ち，秘密を守りとおせば，新入生クラスの勝ちという学年対抗の勝負が行われていたという。一方，バッサー女子大学では，2年生が密儀として行う「クラスの木」植樹に対して，その儀式が挙行される日時と場所を，彼女らが流す偽情報・怪情報などをものともせず，新入生が探り当て，密儀の現場を押さえられるかどうかという，クラス（学年）対抗の勝負が行われていたとされる。

クラス決戦という形態をとるかどうかは別にして，ほとんどの女子大学で何らかの新入生歓迎儀式が，毎年恒例の行事として定着していったことは事実である。たとえば，スミス女子大学では毎年，体育館を利用して2年生主催の「新入生歓迎パーティ」(freshman Frolic) を催すのを常としていた。1901年に刊行された一つの雑誌記事は，そのパーティの模様をつぎのように描写している。つまり，「2年生はみな男装し，エスコート役の男性に扮し（cavalier)，それぞれに割り当てられた新入生の前に立つ。そして，その新入生に花束を差し出し，ダンスへの誘いを申し込み，相手が心ゆくまでダンスを堪能するまで，エスコート役として踊りに付き添うのである。さらに，この新人を友人たちに紹介して回ったり，自分の連れ合いとなる新入生のために，ダンスの合間にはまめまめしく，シャーベットやフラッペなどを確保し，運んできたりする。また，夕食としてだされたごちそうを取り分けて持ってきたりもする。…こうしてパーティがお開きとなった後には，2年生はみな，それぞれ自分の相方となった新入生を，その宿舎まで送り届け，お別れの前に自分のために特別に選んでくれた花を一本，頂けないかと懇願する。また，お互いに身につけているものを交